日本キリスト教会　**涉外委員会便り**　2021年4月11日

第44号

「公同教会の交わり」

涉外委員長　冨永憲司（柏木教会牧師）

日本キリスト教会は、公同教会の一肢(ひとえだ)として、内外の公同教会と、ある時は批判的に、ある時は協同しながら、主なる神のご栄光を現し、主の体である教会形成に励んできました。その公同教会同士の新たな交わりの一つとして、今年の第71回大会において、大韓イエス教長老会(合同)The General Assembly of the Presbyterian Church in Korea (GAPCK)との宣教協約締結が行われます。これは、在日大韓基督教会 The Korean Church of Christ in Japan (KCCJ; 1997年調印)、台湾基督長老教会 The Presbyterian Church in Taiwan (PCT; 2006年調印)、韓国基督教長老会 The Presbyterian Church in the Republic of Korea (PROK; 2010年調印)、大韓イエス教長老会(統合)The Presbyterian Church of Korea (PCK; 2011年調印)に続いて、日本キリスト教会としては第5番目の宣教協約締結となります。

また、現在、日本キリスト教会と歴史的な繋がりが深いアメリカの二つの教会、すなわちアメリカ合衆国長老教会 Presbyterian Church in the United States of America (PCUSA)とアメリカ改革派教会 Reformed Church in America (RCA)との宣教協約締結も目指して交渉を重ねていますので、御覚えください。

ところで、そのような公同教会の交わりは、今後ともますます国内外において必要になり、深められていかねばならないと思われますが、そのところで大事なのは各個教会とその信徒レベルでの交わりではないでしょうか。

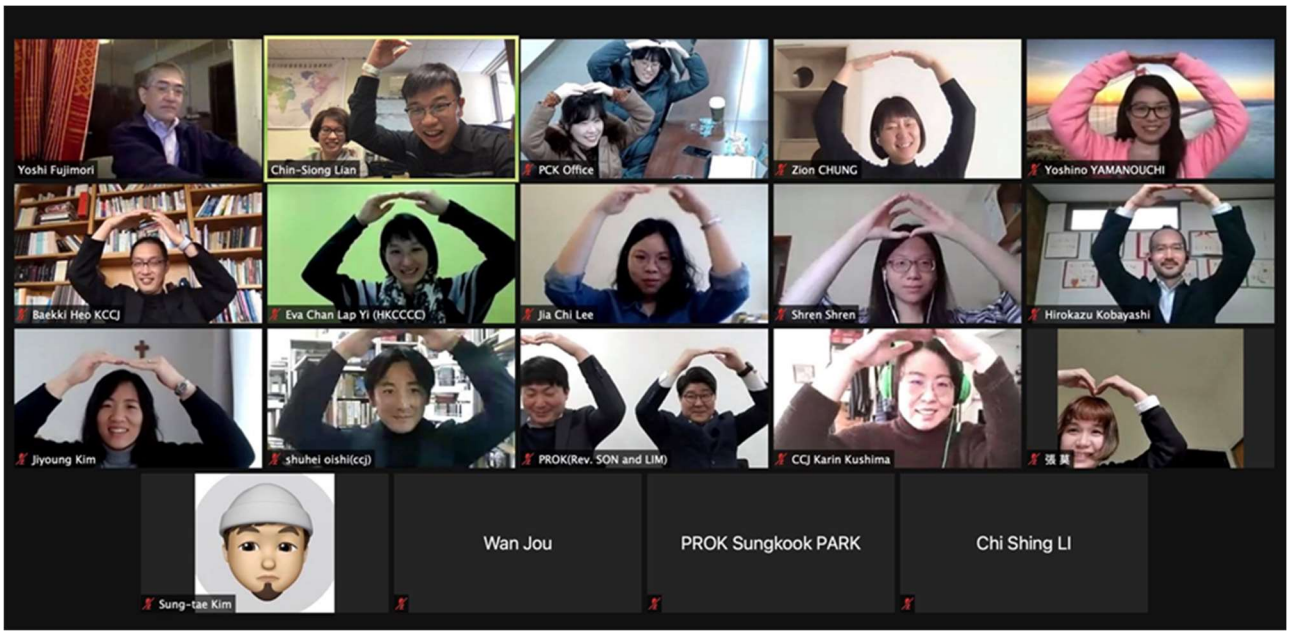
公同教会の交わりといっても、大会や中会、あるいは涉外委員会が、単に儀礼的なお交わりをしておけば良いのではありません。特に、宣教協約を結んだ内外諸教会とは、各個教会やその信徒レベルでのお交わりが具体的な宣教の場でもっと深められていくことが望ましく、それでこそ両教会で目指された公同教会の交わりと宣教の働きを本当に造り上げていくと思います。

ところで、国内に限って言うと、日本キリスト教会では、宣教協約を締結している在日大韓基督教会以外に、日本キリスト教会と歴史的な繋がりをもつ日本キリスト改革派教会と日本基督教団全国連合長老会とも、定期的なお交わりを続けています。それらの交わりが示すものは、日本キリスト教会は単に宣教協約を締結した教会としか交わりを持たないというのではなく、たとえ宣教協約には至らなくても、国内にあって同じ改革長老教会としての良い交わりを持ちつつ、可能なところから、協力して日本宣教を考えていく教会になりたいということではないでしょうか。

もっとも、残念なことに、それら国内の諸教会との交わりも大会的レベルでの儀礼的交わりに留まってもいるきらいがあります。繰り返しになりますが、どうしたら大会レベルでの交わりが中会や各個教会、さらには信徒レベルでの交わりにまで至り実質化していくのか、涉外委員会としてもそのことを意識して、まずはそれら諸教会との交わりに関しても、みなさまにもっとお伝えしていく努力をしたいと考えています。

世界改革教会共同体 東北アジア部会

（オンライン総会　報告）



オンライン(Zoom)会議上の「決議」の場面。身振りで全会一致が確認され、新しい三役が選ばれた。

2021年2月8日(月)および9日(火)、それぞれ日本時間午前10時から、表題の神学協議会・総会がオンラインで行われました。朝3時のレバノンからゲスト参加された、世界改革教会共同体(WCRC; World Communion of Reformed Churches)議長のナジラ・カッサブ(Najla Kassab)牧師や、中国をめぐる現況と福音について講演なさった台湾神学研究学院助理教授の邱　凱莉(チウ・カイリ)博士をはじめ、台湾・韓国・香港・日本から計23名が出席しました。日本からの参加者は、在日大韓基督教会3名、日本キリスト教会5名の計8名でした。以下に3名からの報告文と、ホストを務めた台湾基督長老教会の青年代表による報告の日本語訳を掲載します。

「青年として」

山内美乃（宝塚売布教会）

私は今回の総会だけでなく、2019年の東北アジア部会（NEAAC; North East Asia Area Council)ユースプログラムのリユニオンにも参加し、総会内で行った青年近況報告の準備にも関わらせていただきました。今回の総会に関わらせていただき、様々な視点からの意見を発表する場の大切さに気付きました。私にとっては日本国内や外国で起きている問題についても、メディアを通して知ることだけでなく青年としての視点を通して知ることでより自身の問題として考えるきっかけになったと思います。これからも、教会で「青年として」何ができるか考え、少しでも実行に移してみたいです。この一年間、新型コロナウイルスの流行で人と話す機会自体が減ってしまいました。そんな中でも、本来とは違う形ではありますが会議が開かれ、参加する機会をいただけたことに感謝します。

「主の正しい支配を共に祈り求めて」

牧師　小林宏和（世田谷千歳教会）

次世代を担う諸教会の仲間が集まった、WCRC 東北アジア部会総会における台湾の邱凱莉博士の講演の一つのテーマは帝国と教会でしたが、特に香港の状況を踏まえて据えられたこのテーマは、総会の中での各教会の諸報告を合わせて考えると、東北アジアそれぞれの地域における課題に関わるものでした。私たちは日々のニュースを通し力奪われること多く、どのような体制の共同体においても、神ではないものが神であるかのように振る舞うことや、古い力や世への追従を要求することが問題になっていることを痛感しています。しかし、姉妹兄弟が直面する諸問題が平和の神によって「速やかに打ち砕かれる」ことを共に願い、主の祈りの特に第二祈願「御国を来たらせたまえ」を共に祈りながら、課された事柄を主の希望と共に考え取り組んでいくことが許されています。そのことを感謝しつつ具体的に考えるができた良い総会でした。

「すべての、困難に直面している人々の隣人として」

九嶋果林（札幌北一条教会）

各教会の発表も興味深かったのですが、私は WCRC ナジラ・カッサブ議長による WCRC 全体の活動報告が印象深かったのでここに報告したいと思います。というのも、私がいま個人的に最も興味をもっているのは、教会と教会組織群は具体的に社会問題解決のために何か取り組むことができるだろうか、という点です。神学教育を推し進めることはもちろん、前提として貧困問題を視野に世界の政治経済についても学ぶことのできる研修制度(GEM School)や、世界平和を祈るために各派との連携を強めることや、各地を訪ねる活動、警察の差別的な取り締まりの犠牲となったジョージ・フロイド（George Floyd)さんの死を契機に爆発的広がりを見せた「ブラック・ライヴズ・マター」（Black Lives Matter. ＝黒人の命も大事)運動を例に挙げ、困難に立ち向かう教会を支援する姿勢を明らかにしました。最後にカッサブ議長は WCRC の課題として、次の総幹事任命、すべての正義への過程に焦点をあて続けること、各地域の支援、影響力のある正義(の実行)、財政的持続可能性を挙げました。この組織の一員として、日本キリスト教会としてもこの考えを共有し世界平和を実現するために働くことのできる「隣人」となりたいと考えました。

「東北アジア部会はヴァーチュアルな交わりを強化します」

リー・チアチ(台湾基督長老教会青年代表：ウェブサイトより)

COVID-19 パンデミックのため、世界改革教会共同体(WCRC)東北アジア部会（NEAAC）は、オンラインにより台湾基督長老教会（PCT)の主催により 2021 年 2 月 8 日および 9 日に開催されました。

会衆への挨拶のなかで、WCRC のナジラ・カッサブ議長は、出席者に COVID-19 パンデミックの下で教会がとることができる行動を考えるよう励ましました。彼女は、本総会のテーマ「交わりの再発見：権力、正当な参加、福音の根本の回復」に応えて、この困難な時の交わりの重要性を強調しました。

基調講演者の邱　凱莉博士は、マタイによる福音書の「はっきり言っておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」(25:40)を引用して、隅に追いやられた人々を愛することの大切さを明らかにしました。

これにカッサブ議長は共感し、「私たちは変化の時にいます。正しい方法で隣人とつながり愛し続けることができるかということは、今日の私たちにとっての課題なのです」と述べました。

ローテーションに従い、在日大韓基督教会（KCCJ)の許　伯基が2021～2022年の東北アジア部会議長に選出されました。日本キリスト教会（CCJ)の大石周平と九嶋果林がそれぞれ書記と会計に選出されました。

会議ではまた、どのような創造的な方法でパンデミックに対応しているかに焦点を当てて、それぞれのメンバーから近況報告を受けました。

「世界的な感染の大流行は、国内の宣教活動だけでなく、渉外活動やエキュメニカルな活動にも多くの困難をもたらしました」と韓国基督教長老会（PROK)のイム・チョンホァンは述べています。「直接の対面会議や交流を行うことはできませんが、オンラインで交わりを保ち、協力関係にある教会や組織とCOVID-19への対応について体験を共有し、ともにこの状況への対策を模索し、教会の在り方について協議しています。」

「この[パンデミック]状況下では、教会の預言者としての役割は重要であると考えられなければなりません。今こそ教会は、人の命よりお金を大切にする政治や、富める者のために貧しい人々の財産を奪う経済社会に対して、はっきりと神のメッセージを示すべき時です」と許　伯基は報告しました。

中華基督教会香港区会（HKCCCC)のチャン・ラプイは、COVID期間中の新しい政治状況の変化の下で香港の人々と教会が直面している困難な課題について述べました。ペッキはHKCCCCに深い憂慮を示し、こう述べました。「心が痛む思いです。私たちは香港の教会と人々のために祈ります。」

東北アジア部会の会員教会は、台湾基督長老教会、在日大韓基督教会、日本キリスト教会、中国キリスト教会香港評議会、韓国基督教長老会、および大韓イエス教長老会です。

渉外委員会より

渉外委員会の活動を覚え、祈り支えてくださり、ありがとうございます。2020年度はCOVID-19のために、国内はおろか、国際的にもすべてオンラインベースの活動を余儀なくされました。日本キリスト教会においても、中会の時期をずらしたり、大会を文書による意見集約という形態で開催したりと、困難な1年間でありました。

今号においては世界改革教会共同体東北アジア部会の総会にオンライン参加した皆さんから寄せられた文章を中心に掲載しましたが、困難な中にも主の御心を聴き取って誠実に仕え、対面しての交わりが困難な中でもこのようにオンラインベースで交わりを深めていこうとする姿勢を確認するなど、励ましに満ちた内容であったと思います。

これから、5月10日(月)には日本基督改革派教会との協議会が、また6月21日(月)には日本基督教団全国連合長老会との交流会が予定されており、日本キリスト教会からは久野真一郎議長が発題されます。しかし本当に大切なことは、委員長の挨拶にもある通り、各教団間の代表のみによる儀礼的な交流ではなく、教会単位、あるいは中会単位の交流であろうと思います。そうした交流が今後深められていくことを願っております。